



震災、復興からその先へ ～ノーマライゼーションという言葉のいないまちづくり～

(一財)自治体国際化協会交流支援部交流親善課 是永 隆宏 (和歌山県派遣)

海外自治体幹部交流協力セミナー in 岩手県陸前高田市

2011年3月11日、決して忘れることのできない記憶。たった一瞬で日常が非日常に変わる瞬間。東日本大震災を経験したまち、陸前高田市で海外自治体幹部交流協力セミナーを開催しました。

本セミナーは、日本の地方自治の現状や課題について視察や意見交換を行い、互いの自治や文化などについて理解を深めるプログラムで、アメリカ・カナダの自治体や関係団体の幹部8人（全米知事会課長、オンタリオ州自治体実務者協議会会長等）が参加し、『震災と復興の経験・教訓と、「ノーマライゼーションという言葉のいないまちづくり」の取り組みについて』というテーマのもと、同市の震災復興からの取り組みについて学びました。

日程	内容（一部抜粋）
1日目	<p>《東京セミナー》</p> <p>【講義】日本の地方行政制度（明治大学 木村俊介教授）</p> <p>【視察】首都圏外郭放水路</p>
2日目	<p>【表敬訪問】外務省（地方連携推進室長）</p> <p>【表敬訪問】総務省（総括審議官、若手職員との意見交換）</p>
3日目	<p>《陸前高田市セミナー》</p> <p>【視察】奇跡の一本松等、被災地視察</p> <p>【講義】市による東日本大震災被災状況検証報告</p>
4日目	<p>【講義：モンティホール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前消防団長による体験談 ・市のノーマライゼーション施策 ・元JET モンゴメリー・ディクソン氏について <p>【視察】ふるさと納税を活用した障がい者雇用プロジェクト</p> <p>【視察】文化財修復活動（高田高校の船）</p> <p>【ホームステイ】</p>
5日目	【ホームステイ】
6日目	<p>【グループワーク】地元中学生との交流</p> <p>【体験】避難訓練体験（地元中学生と一緒に）</p> <p>【陸前高田市戸羽市長との意見交換】</p>
7日目	<p>【体験】遊漁船体験（陸前高田市漁師との交流）</p> <p>【視察】気仙大工左官伝承館</p> <p>【帰国前参加者との最後の意見交換】</p>

セミナー日程表（2017年11月7日～11月13日）

東京セミナー

本セミナーのテーマに即した視察先として、「首都圏外郭放水路」を見学しました。別名「地下神殿」とも言われる巨大放水路の排水システムなどの紹介があり、参加者は首都東京の防災の一端に感銘を受けていました。

また、外務省および総務省では、地方との連携、地方行政に係る国の役割等について説明を受け、特に、総務省では、若手職員と日本の地方議会に係る昨今の課題について意見交換し、共通の課題に直面していることを確認し合うとともに、具体的な解決策について、両国の取り組みを紹介しながら活発に議論を交わしました。

陸前高田市セミナー

陸前高田市に到着後、すぐに参加者の表情は変わりました。そこには、東日本大震災から6年たった今でも災害の大きな爪痕が残っているまちの風景がありました。そのような中であって、力強くそびえ立つ「奇跡の一本松」は震災に負けない市民の強い気持ちを象徴していました。



奇跡の一本松を訪れた参加者

視察後には陸前高田市役所を訪問し、震災の被災状況について説明を受けました。参加者からは「今は想像もしない自然災害が、世界各地で起こっている。非常事態に備えて、あらゆる側面で防災について問い直す時期が来ているのかもしれない」との意見がありました。

また、外国語指導助手（ALT）として、地元の小・中学校の英語教育に従事し、東日本大震災で亡くなったモンゴメリー・ディクソンさんの愛称にちなんで名付けられた「モンティ・ホール」を訪れました。

「モンティ先生」として親しまれ、日本文化をこよなく愛し、地元住民の方々と家族のように交流していたモンゴメリーさんの話



モンティ・ホールにて講義

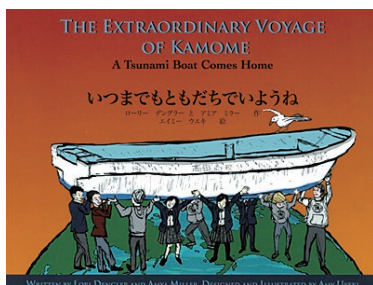
に、参加者からは、「日米の架け橋として活躍していた若者を失ったことは残念でならない」とのコメントがありました。

震災がもたらしたもの

旧生出小学校では、震災を受けてたった一人生き残った学芸員の熊谷副主幹から文化財の修復作業について話を聞きました。津波で海水と泥をかぶった文化財の保存修復は世界でも前例がなく、熊谷さんたちはマニュアルがない中で試行錯誤をしながら、今も文化財の修復活動に努めています。市民の財産が一日にして壊された話を参加者は悲痛な面持ちで聞き入っていました。

一方で、震災をきっかけに新たな交流も生まれました。震災の津波で流された高田高校の実習船が、その2年後、約8,000キロ離れたアメリカ・カリフォルニア州クレセントシティに漂着したのです。船には、海藻や貝が付着していたものの、大きな損傷はなく、現地の高校生が返還を呼びかけ、震災から2年7カ月を経て還ってきました。

震災で多くのものが失われた中、還ってきた「奇跡の船」。この船をきっかけに、現地の高校と高田高校は互いに訪問しあうなど、交流が深まっています。実際に還ってきた船



津波で流された船をきっかけに始まった交流を描いた絵本（日本語・英語併記）^(注)

を見て、参加者は、震災から生まれた二校の絆に強く感銘を受けていました。

市民主体のまちづくり

本セミナーのテーマである、「ノーマライゼーションという言葉のいらぬまちづくり」の一環として、障がい者を雇用し、ふるさと納税の返礼品の梱包等を行う会社を視察しました。会社側からは、「障がい者の持つ集中

力・勤勉さに一目置いており、大切な戦力である」との話があり、まさにすべての市民が市政に関わり、一丸となって、まちづくりをしている様子がかえりました。

また、地元中学生と、「外国人目線での陸前高田市のまちづくり」についてグループワークを行いました。参加者は、被災後のまちづくりに若い世代が参画していることに感銘を受け、中学生との貴重な



地元中学生とのグループワーク

国際交流の機会を楽しんでいました。その後、東日本大震災級の津波を想定した避難訓練に、地元中学生と共に参加し、訓練終了後には黙とうを捧げ、被災者の冥福と被災地の一日も早い復興を願いました。

新たなステップ

陸前高田市戸羽市長との意見交換では、「復興からのステップを、市民と共にスピード感をもって対応することが重要だ。また、震災の経験を忘れずに後生に伝え、この経験を世界に発信していくことも被災地の義務だ。」との話があり、参加者も市長のリーダーシップに関心を寄せていました。

陸前高田市滞在の最終日には滞在中にお世話になったホストファミリーと再会し、互いに別れを惜しむ姿には心温まるものがありました。

二人のゲストを受け入れることを、家族全員緊張していましたが、子どもたちもすぐに打ち解け、最初の晩は日本食を楽しんでもらえたようでした。お二人は子育て経験者ということもあり、英語が話せない妻とiPhoneを駆使して子育てトークを充実させていました。私は普段脳の奥の方にしまっている英語脳をわずかに活動させることができたので今後機会があれば外国の方を受け入れていくようにしたいと考えています。

（ホストファミリー 吉田 重之さん）

このセミナーを通じて得た絆は、今後もさまざまな課題解決の大きな一助となるでしょう。陸前高田市でお世話になった皆様には、深く感謝を申し上げます。

(注) 参照 URL : <http://digitalcommons.humboldt.edu/monographs/1/>